

国語

文脈把握
内容理解
語句・文法

1 次の文章を読み、あとの(1)～(7)の問いに答えよ。

1 文章はどこで書くのか。そんなことはわかりきっている。手で書くにきまつて
いるではないか、と言うだろう。A、手は命じられたままの字を書くにすぎ
ない。どこでその手に命令するのか。そう考えると、文章はどこで書くのか、も
よくわからなくなってくる。

2 日本人はどうも目で書くことが多いように思われる。字面じづらにひかれやすい。沈黙
の言葉をつむいで文章にする。外国の小説家が、速記のできる秘書嬢をはべらせて、
自身は部屋を歩いたり、立ち止まったりしながら、口述してゆく。そういう話を
聞くと、われわれはひどくおどろいて、それでは、さぞかしいい加減な文章にな
るだろうと想像するが、必ずしもそうではない。会話のやりとりなどは、一度口
で言ってみてからでないと、自然な表現になりにくいものだ。

3 われわれのように声にしない言葉を直接に紙に書きつけることをしていると、耳
は遊んでしまう。わが国に戯曲にすぐれたものがすくないのも、ものを書くとき
に耳を使わないことと関係がありそうである。

4 前にも引き合いに出したバートランド・ラッセルは哲学者だが、すぐれた文章
家としても知られていた。そのラッセルは読書を目でなく耳でした。だれかに読
んでもらい、それを聞くのである。読み手にはたいがい夫人が当たった。そうし
て文章を耳で記憶し、理解する訓練を積んでいたのである。文章を書くときも声
を出して書き、書いた文章は声を出して読み返した。そうするようになって、初
めはまずかった文章が上手になった、とラッセルが自身で述懐している。(A)

5 われわれも自分の書いた文章を読み返すときには声を出したほうがよいことを
知っている。音読すると、文章の調子のわるいところがすぐわかる。(イ)ある小
説家を読みやすさの秘訣ひけつとして、近いところに同じ語を繰り返さぬことをあげて
いる。同じことを言うのはよくわかってよさそうなのなのに、読者にとっては
迷惑なことになるらしい。音読してみると、そういうよくない反復はんぷくに気づくこと
ができる。

6 C、自分で書いたものを音読して、つかえるようなら、その前後は表現
としてなにか問題をもっていることが多く、再考を要する。(ウ) こういうことも、

耳が洗練されていないと効果がない。(エ) D 馬耳東風ばにとうふうということがあるが、鈍感
な耳ではいくら声を出して書き、読み返しても意味はすくない。ところで、近代
の日本人はこの言語的聴覚がどうもお粗末なのである。翻訳的悪文をじつとら
んで読むくせがついてしまつて、言葉にリズムがあることすら忘れた。

7 F 学校の教育にも責任がある。読むのは黙読ときめてかかつて怪しまない。小学
校の初年級でこそ音読をさせるものの、なるべく早く黙読に切り換えようとして
いるかのごとくである。朗読についての訓練はほとんど受けなくて成長する。ヨー
ロッパやアメリカの詩人が自作の朗読をして、多くの聴衆を集めるのに、わが国
の近代詩人は原則として人前で詩の朗読をしない。極端な例だが、自分の詩のあ
る部分をどう読むかたずねられて返事に窮したという詩人さえある。詩人ですら
耳で書かずに、目で詩作している人が多いことを示している。

8 もつと朗読をする必要がある。すぐれた文章なら遠慮することなく暗誦あんじゅうを命じ
る。子供の記憶力ならたいいの長さは丸暗記してしまう。語句の説明などどう
でもいい。説明してわかって、わかるのは説明の言葉でしかない。こういうこ
とを書いてあるとは覚えていても、原文がどうであったかははじめから頭に入っ
ていない。説明がついていなくてもすぐれた表現そのものを記憶していれば、心
の中で反芻はんそうしているうちに意味はおのずからわかってくる。

9 われわれが、古典の文章などを話題にしているときなどに、よく、「こういう意
味のところがあがるが……」と言う。もとのテクストテクストは浮かんてこないのに意味内容
だけ覚えているのである。G こういう読み方をしては、文章を書くときの助け
にならないのは当然であろう。

10 古典の文章はともかく、近代散文で暗誦するにふさわしい文章があまりにもす
くないのもわれわれの不幸と言わなくてはならない。それでつい目だけで読んで
思想と意味を問題にすることになってしまふ。朗々と誦するにふさわしい文章を
持たなくなつて久しいことさえ思い起こされることがなくなつてきている。音読、朗読、
暗誦は文章を書く訓練としてきわめて重要なものである。

(注1) 反復＝繰り返し。

(外山滋比古「日本の文章」による)

(注2) 暗誦＝暗記したことを、正確に口に出して言えること。

(注3) 反芻し繰り返して味わうこと。
(注4) テキストは原文、テキスト。

(1) 文章中の **A**・**C** に入ることばとして最も適当なものを次のア～オのうちから一つずつ選び、その記号を書け。

ア なぜなら イ すると ウ しかし エ ところで オ また

(2) 文章中に **B** 日本人はどうも目で書くことが多いように思われる とあるが、「目で書くこと」とは、具体的にどういうことか。文章中から二十字で探し、そのはじめと終わりの三字を書け。

(3) 文章中の **D** 馬耳東風 と似た意味をもつことわざを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 蛙の子は蛙 イ 犬に論語
ウ 馬子にも衣装 エ 河童の川流れ

(4) 文章中の **E** 鈍感な と同じ品詞のものを次のア～エの——線部のうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 彼はとてもゆっくり話した。
イ 努力して大きな成功を取めた。
ウ 立派な門構えの家を訪れた。
エ 美しい海岸に沿って散歩した。

(5) 文章中に **F** 学校の教育にも責任がある とあるが、筆者は学校でどのようなことに力を入れて教育すればよいと述べているか。「……こと」という形で二十字以上、二十五字以内(句読点も字数に数える)で書け。

(6) 文章中の **G** こういう読み方 とは、どのような読み方か。最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 語句の意味もわからないままに文章を丸暗記するような読み方。
イ 心の中で繰り返し味わいながら意味を理解するという読み方。
ウ 原文がわからないままに説明や意味内容だけを理解する読み方。
エ 意味を正しく理解するために音読や暗誦をするような読み方。

(7) 文章中には、次の **□** 内の一文が抜けている。この一文はどこに入るか。最も適当な位置を文章中の **(ア)**～**(エ)**のうちから一つ選び、その記号を書け。

同じ言葉が重なっているのにも気づきやすい。

文脈把握 内容理解

語句・文法 漢字

2 次の文章を読み、あとの(1)～(8)の問いに答えよ。

A 北国では夏は駆け足で去っていく。遠ざかっていく足音が聞こえるようで、自分がこの場所に取り残されていくような気分になり、やがてやってくる秋は淋しい。

この季節、たいてい私は知床にいく。晩夏の間はカラフトマスの最盛期で、漁師は一瞬の休みもなく働きつづける。時化で一日海にでることができないと、魚がはいりすぎて網が破れる。化学繊維でつくった丈夫な網が破れるのは、ただならぬ力が働いたせいである。自然の力の **B** に驚くことは **再a再b** のことだ。

まだ明けやらぬ早朝、魚の運搬船が番屋と無線連絡をとりあいながら漁港を出発する。運搬船が沖合いにくるのを見はからい、漁船は船外機つきのプラスチックボートで番屋前の桟橋を出港する。

漁師たちは沖で運搬船に乗りかえ、さっそく網上げがはじまる。船べりにならび、魚と力くらべをして網を引っぱるのだ。陸網、中網、沖網と二箇所ずつ計六箇所の網をあげると、吃水が沈んで満船状態になる。ほぼ一万五千本のマスがあがるのである。水から甲板にほうりだされ、魚ははねまわる。船倉に落ちていき、それでも暴れつづけ、やがて静かになる。

豊かな海だ。生命のたぎる海だと、誰でもはじめはそう思うであろう。私もそう思った。しかし、同じ光景を何度も見ているうち、**D** 考え方が変わった。

マスは人工孵化によって稚魚に育てられ、放流されたのかもしれない。しかし、何千キロか何万キロかの北太平洋の旅をして成魚となり、腹に卵を抱き、子孫を残すために故郷の小さな川に必死の思いで帰ってきたのである。もちろん人間に食べられるために生きてきたのではない。

すべての生物は食物連鎖の中に生きている以上、ほかの命を食べなければ生きていくことはできないのである。人間も同じだ。だからこそ、ほかの生物の死を **E** と見てしまうのである。彼らの死が、すなわち私たちの生なのだ。この自然の摂理は、私たちが生きていく上では忘れてはならないことだ。

晩夏から初秋になると、ますます知床では命の **G** に満ちてくる。知床半島に

は小さな川が幾つもあり、河口が滝になって溯れないというようなことがないかぎり、水が真黒になって盛り上がるほどにマスやサケが帰ってくる。こんなに広大な海で生きてきたのに、どうしてこんなやさやかな故郷がわかるのだろうか。

カラフトマスの産卵の季節が終り、サケにかわる頃、私は番屋近くのルシヤ川に潜ったことがある。人工孵化のためにマスが採集される川で、卵はもう充分とったため、網はいれていなかった。潜ってまず感じたのは、魚は自殺をしないということだ。命の一滴が自然に燃え尽きるまで生きている。

生涯で最大の仕事の産卵を終え、ぼろぼろになって死ぬばかりになった魚が、河口の深みにたくさんいた。顔が半分散骨になっていたり、尾ひれがなく骨で泳いでいたり、腹に大きな穴があいて身体が横になってしまったり、凄絶な姿であった。死ねば白く透明になるのだが、生きていけばサーモンピンクが残っている。底には死んだ魚が幾重にもなっている。

先に産卵した川底を掘ってまた産卵するものだから、卵がピンポン玉のように無数にはねて流れてくる。その上に新しい生きのいい魚が、どんどん溯上していく。生と死が交差する光景である。

秋は美しいのだが、生命の凄絶さのある季節なのだ。だからこそ美しい。

(立松和平「半島」による。一部省略あり)

(注1) 知床＝北海道北東部、オホーツク海に突出する知床半島のこと。世界自然遺産。

(注2) 番屋＝定置網が張ってある漁場のすぐ前に建てた小屋で、漁師たちが共同生活をするところ。

(注3) 吃水＝船体の水中につかっている部分。

(1) 文章中の A 北国では夏は駆け足で去っていく を単語に区切ったとき、次の A 〓ののうちから、区切り方が誤っている箇所を一つ選び、その記号を書け。

アイウエオ カキク ケコ
北国／で／は／夏／は／駆け／足／で／去っ／て／いく

(2) 文章中の B・E・G に入ることばとして最も適当なものを次の A 〓ののうちから一つずつ選び、その記号を書け。

A 喜び イ 一滴 ウ 賑わい 工 偉大さ

(3) 文章中の C 再 a 再 b の a・b にあてはまる漢数字をそれぞれ書け。

(4) 文章中に D 考え方が変わった とあるが、筆者の考えはどのように変わったのか。次の文の a・b に入ることばを、文章中から a は六字、b は八字で抜き出して書け。

筆者は知床の海や川を、はじめは a 場所だと思っていたが、夏から秋にかけての光景を何度も見ているうちに、b 場所だと思っようになった。

(5) 文章中に F この自然の摂理は、私たちが生きていく上では忘れてはならないことだ とあるが、ここでの筆者の気持ちを説明したものとして最も適当なものを次の A 〓ののうちから一つ選び、その記号を書け。

A 筆者は、ほかの生物を食べなければ生きていくことができない人間の存在を悲しく思っている。

I 筆者は、人間の命はほかの生物の犠牲の上に成り立っていることを改めて心に刻もうとしている。

ウ 筆者は、子孫を残すために必死の思いで故郷の川に帰ってくるマスやサケの習性に感心している。

工 筆者は、ほかの生物が誕生することが人間の生につながっていくということに心に留めている。

(6) 文章中に H 魚は自殺をしない とあるが、これはどういうことか。このことを説明した次の文の 〓 に入ることばを文章中から十三字で抜き出して書け。

魚は体がぼろぼろになっても自ら死を選ぶことはせず、 〓 まで生き続けるといこと。

(7) 文章中に I だからこそ美しい とあるが、筆者はなぜ秋は美しいと思っているのか。その理由として最も適当なものを次の A 〓ののうちから一つ選び、その記号を書け。

A 秋は、死を顧みない生物の計り知れない恐ろしさを感じるから。

I 生物が死んでいく秋は、その死で生きる人間にとって大切だから。

ウ 秋は、生命の交替のすさまじさを実感できる季節だから。

工 秋は新たな生命が次々と生まれ、生物の力強さがみなぎるから。

3

次の文章を読み、あとの(1)～(5)の問いに答えよ。

柏原明神(注1)おのみじんといふ神社あり。頭痛を憂(注2)うれふる者これを祈るに、その祈願かなはざるこ
となし。

御徒勤(注3)おんたごんむる某、頭痛を憂ふることあり。ある日強く発りて、悩(注4)なやみける折節(注5)せりかし、知
音(注6)ちんの者来りて、「頭痛には右の神社へ祈願すべし。御身(注7)おんみかく悩みぬれば、参詣(注8)さんげいはなる
まじ。我ら代参(注9)わがしろださんして願をかくべき間、信心(注10)しんじんあれ。」と、さとして、立ち出(注11)たち出でけるが、頭
痛を憂ふる男、耐(注12)たへがたさに枕(注13)まくらとりて寝(注14)ねなしけるが、思はず眠りしに、小猿(注15)こざる二匹
来りて頭痛をうちもみなどせし、その心持ちよきこと言ふばかりなしと、夢心(注16)むしんに思
ひしが、頭痛全快して目覚めける頃、かの代参を頼みし男来りけるゆゑ、起き出で
てその礼を述(注17)のたまべければ、「厚く願かけぬれば快かるべし。」と言ひしゆゑ、夢中(注18)むちゆうの
訳(注19)わけを語りけるに、かの男、大いに驚き、「不思議なるかな。これまでは我らも心づか
ざりしが、社頭(注20)しゃとうにおびただしく猿の額(注21)がくあれば、全く G の来りて御身の病をいや
せしならん。」と、共に驚嘆(注22)おどろきなしけるとなり。

(根岸鎮衛「耳囊」による)

(注1)御徒勤むる某〓徒歩で主人の警護をする、ある下級武士。

(注2)知音の者〓知人。

(注3)代参〓その人に代わって参詣すること。

(注4)社頭〓神体をまつてある建物の前。

(注5)おびただしく〓非常にたくさん。

(1) 文章中の A 悩みける、B 立ち出でけるが、C 思ひしが、D 述べければ のうちか
ら動作主の異なるものを一つ選び、その記号を書け。

(2) 文章中に E 夢中の訳 とあるが、夢の中で体験したことが書かれている部分を
三十字以上、四十字以内で探し、そのはじめと終わりの三十字を書け。

(3) 文章中に F 大いに驚き とあるが、なぜ驚いたのか。その理由として最も適当な
ものを次のア～エのうちから一つ選び、その記号を書け。

ア 不思議なことに自分の思い当たることを言われたから。

イ 相手の者が突然意味不明なことを言い出したから。

ウ どうしても信じられないようなことを言われたから。

エ 自分の思っていた通りのことが現実になったから。

(4) 文章中の G に入ることはとばとして最も適当なものを次のア～エのうちから一
つ選び、その記号を書け。

ア 神官 イ 鬼神 ウ 神使 エ 氏神

(5) この文章の内容として最も適当なものを次のア～エのうちから一つ選び、その
記号を書け。

ア ひどい頭痛をわずらっていた男は、評判の神社に願をかけに出かけて、その
日の晩の夢の中で痛みから解放された。

イ ひどい頭痛をわずらっていた男は、願をかけてもらった神社の力のおかげで、
無事に病から解放されることとなった。

ウ ひどい頭痛をわずらっていた男を心配した友人が、男を無理に神社まで連れ
ていったところ、すぐに痛みから解放された。

エ ひどい頭痛をわずらっていた男に頼まれて神社へ代参に出かけた男は、神社
からもどる途中で、男が病から解放されたことを知った。